

《目的》

学校内科医による運動器検診は平成28年度から始まり、今年度で3年目となる。運動器の診療は専門ではない学校内科医が、運動器検診を円滑にかつ効果的に行えるようにそれぞれの担当の学校と試行錯誤している。

今回専門医である整形外科医に依頼して、学校内科医に講演を行った。その講演を通して現在の不安点と今後の課題を検討した。

《方法》

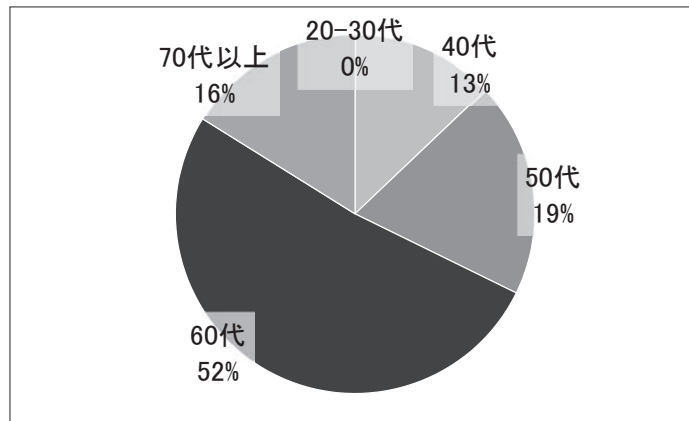
平成30年7月31日に『四肢の運動器検診～何が重要で、何が重要でないか～』という演題で、整形外科北新東病院スポーツ医科学センター長 島本則道先生に講演を依頼した。

その中で出席者にアンケートを行い、講演を行なったことでどのように運動器検診の理解が深まったかを検討した。

《結果》

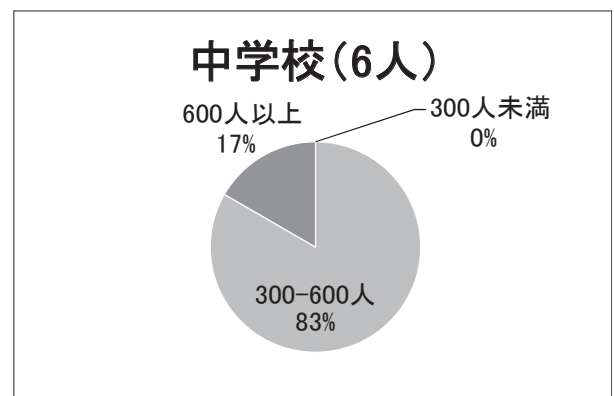
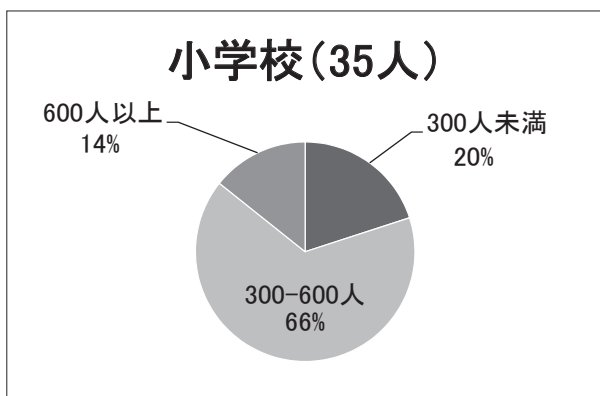
参加者40名 アンケート回収率 77.5%（回収数 31名）

1. 参加者の年代



今回の参加者は40歳代以上のみであった。60代が半数以上を占めていた。

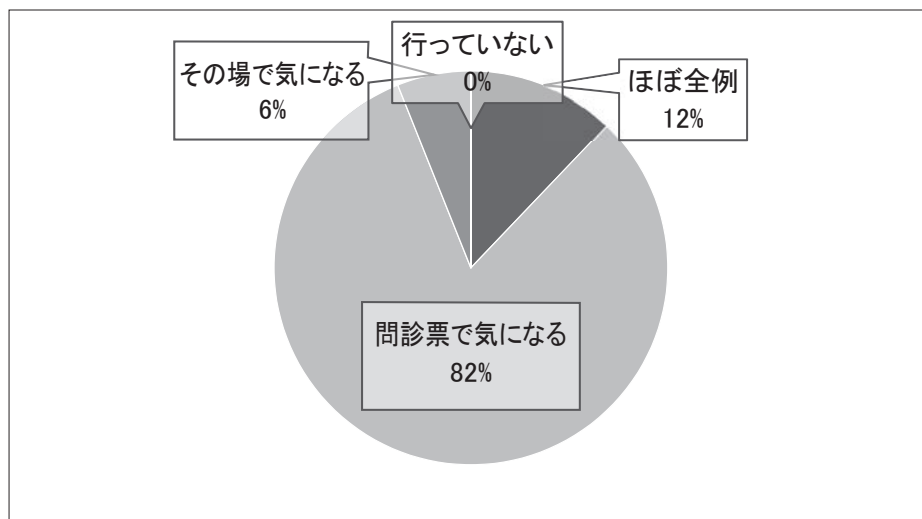
2. 担当している学校とその生徒数



かなりの人数を短時間のうちに診なければならないことがわかる。

3. 現在運動器検診をどのように行っているか？

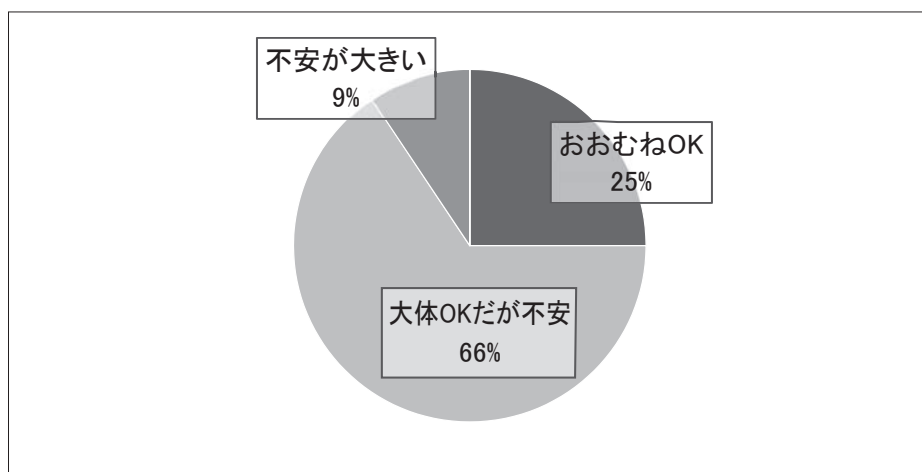
- ① ほぼ全例行っている。
- ② 問診票で保護者が「気になるところがある」と記載した児童生徒のみ行っている。
- ③ 問診票とは関係なく、その場で気になる子を行っている。
- ④ 行っていない。
- ⑤ その他



全員が運動器検診を行っていた。事前に保護者が問診表にチェックした子を中心に診ている医師が80%を超えていた。その他全員を診ているもの、その場で気になる子を診ていると答えた医師もいた。

4. 現在行っている運動器検診をどう感じているか？

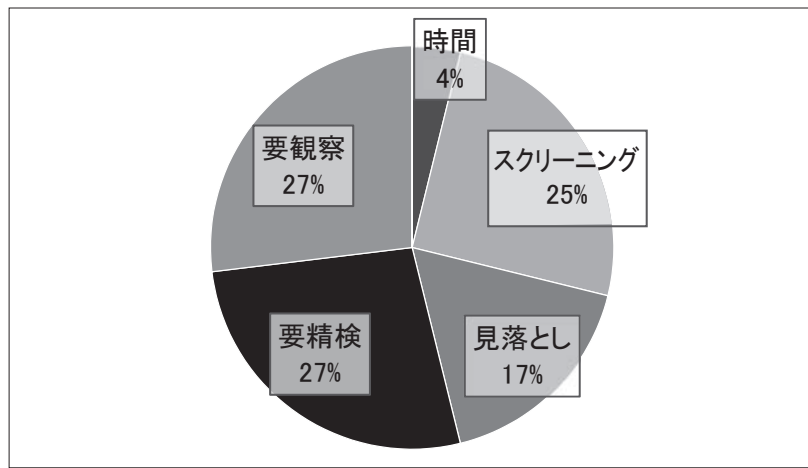
- ① おおむねうまくできていて、あまり不安や心配はない。
- ② 大体うまくいっていると思うが、不安を感じている。
- ③ 不安が大きく、うまくいっていない。
- ④ その他



現時点での自身がおこなっている検診については、おおむね満足している医師が25%であった。しかし6割強が満足しながらも不安を感じていた。不安を強く感じている医師も約1割存在した。

5. 問4に関して、具体的にどのような点に不安を感じるか？

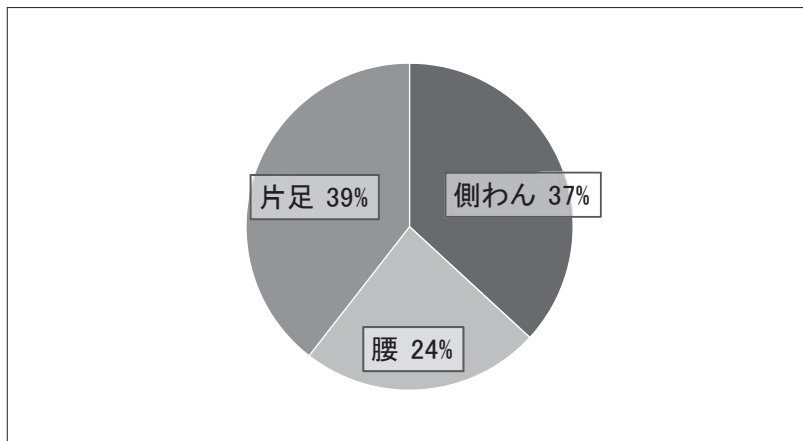
- ① 時間がかかりすぎる。
- ② どこに着目して、スクリーニングをすればいいのかわからない。
- ③ 短時間で行うと見落としが多くなるのではないか。その責任はどうなるのか。
- ④ 「要精検」として、整形外科を受診してもらうタイミングがわからない。
- ⑤ 「要観察」を何年も続けてつけていいのかわからない。
- ⑥ その他



具体的な不安点としては、主にチェックする点、見落とししてしまわないか、整形へ精査に出すタイミングや要観察の子のフォローの仕方などで。あった

6. 運動器検診の中のチェック内容でどの項目に不安が多いか？

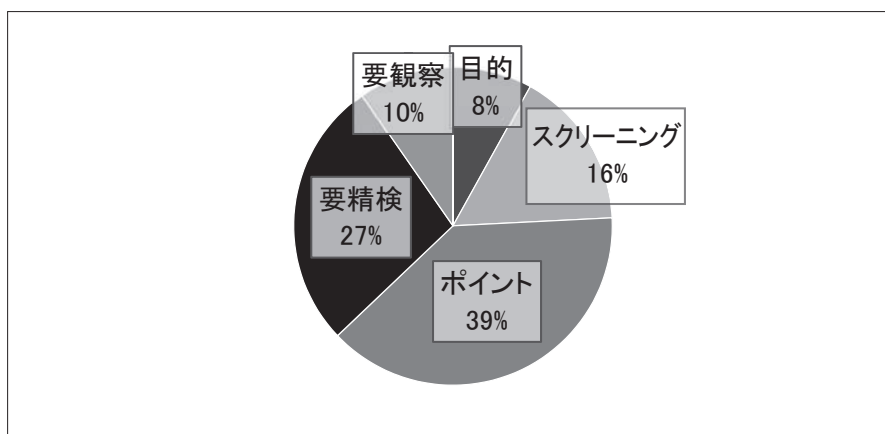
- ① 脊柱側弯症
- ② 腰や上下肢の痛み、十分に伸展、屈曲できないなど運動器障がいと考えられる項目
- ③ 片足立ちが一定時間できない、足の裏全体をつけてしゃがめないなどの、運動不足や苦手が考えられる項目



問診表の項目ごとへの不安では、痛みや左右差は25%くらいで、残りは脊椎側弯症と運動の苦手さをみる項目に対してが半々だった。

7. 今回の講演会で今後の運動器検診のためにあった点は何か？

- ① 運動器検診の目的がわかった
- ② 検診でスクリーニングをしたものが、どのような疾患に結びつくのか
- ③ 検診で診るべきポイント
- ④ 「要精検」にまわすタイミングやポイント
- ⑤ 「要観察」のフォローの仕方
- ⑥ あまり役に立つ内容はなかった
- ⑦ その他



講演から得られたものへの問いへは、検診で診るべきポイントや、要精検として整形外科に紹介するタイミングやポイントを挙げた医師が多かった。痛みや左右差から考えられる疾患概要が16%、運動が苦手な子のチェックのフォローの仕方が10%だった。

8. 今回の講演会に対する感想や意見

わかりやすくなったためになった、動画もあり理解しやすかった、今まで不明だった点が明らかになりスッキリしたなどの好意的な意見が多かった。

問6から片足立ちやしゃがみ込みができない子の整形への受診勧奨を悩む医師が約4割いたが、講演会の中では受診は不要で、家庭や学校で練習をすることで解消すればいいという話があり、これを聞いて安心したという感想も複数あった。

SS式（後述）を行いたいと思うという意見もあったが、同時に短時間の検診では理想通りにはできないという考えもあった。

今後としては、やはり内科医が診るものではなく、できれば整形外科医に頼みたいというもの、高学年の特に女子はTシャツなどの着衣のままではちゃんと観察できない、家庭や学校でもっとチェックや練習をさせてほしいなどの意見もあった。

《考察》

整形外科の専門ではない学校内科医が、短時間の内科健診の中で運動器検診を行うことに不安を感じている医師が多いことがわかった。

問診表を利用してチェック項目をしぼるように工夫をしながら検診をこなしていても、整形外科的な疾患の見逃しがあるのではないかと、片足立ちやしゃがみ込みができない体の硬さや運動の苦手さを示す項目にチェックされた子をどう扱えばいいのかという不安を持っていた。

今回の講演では、運動器の各部位に痛みがある場合の考えられる疾患の概要、痛みや左右差がなければ、片足立ちやしゃがみ込みができないだけでは整形外科の受診は不要で、家庭や学校で練習をすることが大切との話があった。新たに取り入れられているサポート用の運動プログラムを家庭や学校で利用することで、問題が解消される子が増えるのを期待したい。

講演の中で演者からSS式という検診方法が提案された。入室後、まず両腕をまっすぐ上に拳上、その後後ろから腕をおろす。次に下から真横に両腕を拳上し、一度肘から曲げて伸ばす。腕を下にもどし、腰から前屈。この一連の動作で動きの左右差、痛みの有無、側わん症までをチェックするという方式であった。うまく取り入れられればかなり有効であることが予想されるが、事前に子どもたちにこの動作を練習させる必要があることが課題となった。

今後もこのような講演会を希望するという意見も複数みられたことから、整形外科医と協力して、より効果的な運動器検診が行われるようになるよう検討していきたい。